

実現したいことを相談すれば、専門的な場所につなげてくれる。

長沼 凜華さん

東京藝術大学 油画専攻2年
2021-2022年度 基礎高1・2年専科 / 2023年度 油絵専科
愛知淑徳高校出身



1. 2年前期ゼミ制作風景
2. 2年前期講評展示風景
3. どうか僕を選んで
4. それでも勝ったのは私
5. 映画模範大学生の前田進の肖像

東京藝術大学は特に自由度が高い学校だと感じます。

普段の課題は自主制作が多く、講評会にちゃんと作品を出せたら単位はもらえるのですが、まったく強制的ではないので自分自身でしっかり制作に集中できればせっかくの大学生活を有効活用できないと思いました。

自分が実現したいことを大学に相談すれば何かしら専門的な場所につなげてくれるところが魅力だと思います。

油画の同期は、最初の方こそペインターが多かったのですが今はさらに個人が大人になるまでの、これまでの人生の形成に基づいた実験的な制作をしている人も多く、常に刺激を感じさせてくれる存在が身近にいる環境はとても楽しいです。



作品に対する多角的な考えを生み出すことができる場所

加藤 彩さん

東京藝術大学 油画専攻2年
2022年度 基礎高1・2年専科 / 2023年度 油絵専科
豊田北高校出身



東京藝大では、1年生の後期に取手キャンパスでの実習、2年生の後期に版画実習があり、油絵具だけでなくさまざまな技法に触れ、表現の幅を広げることができます。(「5.山羊」は取手キャンパスでの実習で制作したものです)

取手での実習では、モザイク画、陶版、石材、ステンドグラスの中から一つ選び学んでいきます。私は普段平面作品を制作しており、立体物や油彩、水彩、アクリルなど以外のものに触れることが少ないので、このような機会があることで多くの刺激を受け、作品に対する多角的な考えを生み出すことができます。ちなみにフレスコ画は全員共通で行います。

一般の大学の講義より高校の授業らしさがあり、教授や助手さんが手厚くサポートしてくれるため、自分だけ取り残されてしまうということがなく安心です。講評も教授の方々が、個々がどうしていきたいかを聞きながら、「こういう方法もある」「こうしてみたらどうなるか試してみようか」など、導いてくれる助言をしてくださるので、自分のしたいことの修正するべき点や、より良い方法を見つけ出すことができます。さらに、授業内だけでなく、授業外の同期や先輩、教授との会話は皆、出身や年齢が大きく違うため、新たな発見や驚きがあり、楽しく過ごすことができます。



1. Mon種々
2. ぞくせつ
3. 無題
4. 非自身
5. 山羊

受験対策というより、美術の豊かさを知るといふ経験そのもの

小野 冬黄さん
美術家、編集・校正者

多摩美術大学 大学院美術研究科油画研究領域修了
2002年度 油絵専科 / 2003年度 油絵本科
東邦高校出身



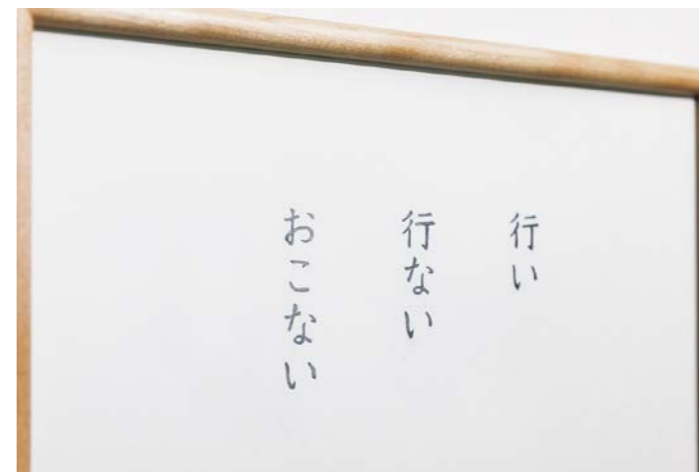
高校受験のとき、その高校に美術科があることを知りながら普通科を受けました。美術科は1クラスしかなく、もし合わなかったら3年間も逃げ場がないと思ったからです。大学受験を考える頃には、勉強を頑張る自分を想像できなかったで、苦しまぎれに美術を志すことにしました。高校受験のときにいったん避けた道が逃げ場としてまた戻ってきた、ということです。

河合塾に行く決めてからも逃げ腰で、まず日曜専科に通い始めました。課題の油彩を描き進めながらアトリエを見回して、私は動揺しました。何となくの雰囲気頼りに恐る恐る描く自分の絵と違って、基礎科から通っているであろう周りの人たちの絵は、すでにそれぞれの個性を獲得している。そう見えました。どうやらうまく描けるかどうかの問題だけではないようだ、ほどなく専科に切り替えます。

正解・不正解と決まった解答のある教科とは違って、美術には「こう描けば間違いはない」という答えはないし、河合塾の先生もそういう

教え方をしませんでした。河合塾での出来事は単なる受験対策というより、美術の豊かさを知るといふ経験そのものです。たとえば、遠くに見える山々の稜線の美しさや緊張感に、あらためて気づくことができるか。そういった世界の見方まで教えてもらっていたように思います。

現在は、展覧会カタログや作品集などの編集・校正、美大が運営するギャラリーの事務運営の仕事に携わりながら、制作活動や展覧会の企画などを行っています。いつのまにか四方を取り囲まれて避けて通れないほど、かかわることすべてが美術につながっていました。幾通りもある道の途中でどちらに進もうか迷うこともあるかもしれませんが、引き返しても遠回りに感じてどこかへたどり着いていたりするので大丈夫です。その都度考えたり手を動かしたりした時間は、これから先も長く自分自身を支えてくれるはずです。



1. 《三行》2021年 撮影：間庭裕基



2. 《インテリア》2022年